

フランス世紀末文学叢書 XIV

# 評論・随想集

ジュール・ラフォルグ／モーリス・バレス  
マルセル・ブルースト 他

曾根元吉 編

釜山 健／武藤剛史／小野萬吉／原島恒夫  
青木謙三 訳



フランス世紀末文学叢書⑭

評論・随想集

一九九〇年六月二五日 初版第一刷印刷

一九九〇年六月三〇日 初版第一刷発行

編者 曾根元吉

訳者 釜山健／武藤剛史／小野萬吉／原島恒夫／青木謙三

発行者 割田剛雄

発行所 株式会社国書刊行会

東京都豊島区巢鴨三―五―一八

電話 〇三(九一七)八二八七 振替東京五一六五二〇九

印刷 大日本印刷株式会社・セイユウ写真印刷株式会社

製本 青木製本有限公司

ISBN4-336-03149-5

# La Prose de la fin de siècle

## 評論・随想集

ジュール・ラフォルグ  
モーリス・バレス  
マルセル・ブルースト 他

曾根元吉 編

釜山 健／武藤剛史  
小野萬吉／原島恒夫  
青木謙三 訳



口繪選定「澁澤龍彦  
装幀」山下昌也

評論・隨想集  
目次

ビエール・ルイス ル・ブルヴァール 釜山健訳 7

\*

ジュール・ラフォルグ 思想と逆説 武藤剛史訳 15

モーリス・メーテルランク 過 去 武藤剛史訳 23

モーリス・メーテルランク 女性の肖像 武藤剛史訳 44

モーリス・メーテルランク 時計について 武藤剛史訳 53

\*

レミ・ド・グールモン アマゾースへの手紙 小野萬吉訳 61

\*

ジュール・ラフォルグ 印象主義 武藤剛史訳 92

マルセル・ブルースト ギュスタヴ・モローの神秘的世界 武藤剛史訳

\*

ジュール・ラフォルグ ボードレール覚書 武藤剛史 訳 120

モリス・バレス ボードレールの狂気 原島恒夫 訳 131

ポール・ブルジェ スタンダール論 青木謙三 訳 175

\*

キ・ド・モーパッサン コート・ダジュール沿岸航海記 小野萬吉 訳 222

\*

ジュール・ラフォルグ ベルリンの街角 武藤剛史 訳 290

ポール・レオトー あるパリジャンのパリ 武藤剛史 訳 297

解説 309

口絵 ヤン・トーロップ《ヤング・ゼネレーション》





## ル・ブルヴァール

ビエール・ルイス 釜山健訳

トルトニが店をたたむ日の夜、私は、その荘厳な最期に立会った。ロマン派全盛期の老舗が消え行くのを一目見ようと、一介の好事家として、私はやって来たのである。

定めの時が来た。私は店を最後に出た。その時、店の主人は、「イリュストラシオン」誌が綴じてある紙挟みを、(形見として)私に差出した。黒いレザー・クロスの表紙には、金文字で、由緒ある「キャフェ・トルトニ<sup>(1)</sup>」という名が記されていた。店の主人は、涙ながらに、こう言切った。「これで、ル・ブルヴァールも、おしまいです。」

このあわれな老人は、瀆神の語を発したことになる。何故というに、ル・ブルヴァールは不滅であり、ル・ブルヴァールの本領は頑固さそのものにあるからである。いかなる時代であろうとも、いかなる人間がいようとも、ル・ブルヴァールはびくともしない。取壊し人夫であろうとも、ル・ブルヴァールの美観を損うことはできない。この通りにあつた建物もその大半は壊され、これに代って、近代的なホテルや、劇場や、銀行や、保険会社が建った。この通りにあつた店という店は、

様相を一変した。レストランというレストランは、改装されたり取っ払われたりした。野の生活には規則正しい耕作が欠かせないように、ル・ブルヴァールの生活にも絶え間ない改築が不可欠のようである。ル・ブルヴァールは、めちやくちやにされればされるほど、かえって、強い個性を發揮する。

それなら、パリの世論やパリ魂なるものに刺激され牛耳られてきた者たちを相手に、半世紀にもわたって、ル・ブルヴァールが絶対的權威を揮い得たのは、何故か。パリ社交界の生活は、西の方へ一里も遠ざかり、今やブローニュの森の周辺にあるというのに、優雅の審判者は、何故に、マドレーヌ寺院と証券取引所との間にあって、変ることなく、慎ましやかに、その地位を守っているのか。

ル・ブルヴァールとは、一体何か。パリの頭脳であろうか。いや、まるで違う。

フランス学士院からパンテオンへ、裁判所から天文台へと広がる知的一画が、パリにはある。この地域の住民は、旅にでも出ないかぎり、セーヌ河に架かる橋をごく稀にしか渡ることはない。彼らは、ときたま、ルーヴル美術館や国立図書館まで足を伸ばすことはあるが、ル・ブルヴァールとは無縁の徒である。こうした連中は、ニューヨークより遙か遠くからやって来たかのように、よそ者として、擦れ違う人々に疑念を抱きつつ、ル・ブルヴァールをさまよい歩く。連中の身なりは異国風だし、髭は時代遅れだし、声は周囲の声にそぐわない。その声たるや、当の御本人は一体何を考えているのか、一体いかなる人間であるのか、といったことを、めったに氣遣わない者の声なの

である。しかし、それでも、パリの頭脳なるものは、こうした多くの連中から成り立っているのである。ル・ブルヴァールの定義は、もつと他に求めなければならない。

ル・ブルヴァールとは、一体何か。生活と活動との中心であろうか。いや、これも違う。

大ざっぱに言つて、パリには二つの源があつて、これが、パリに活気を与えている。一つはシャトレ広場だが、ここは中央市場に近いせいもあつて、交通は頻繁である。いま一つは共和国広場だが、ここは、パリの産業の中心地である。パリは共和国広場で働き、シャトレ広場で身を養う。自然の巧みな摂理であろう、工場は、北駅や東駅やリヨン駅やオルレアン駅(2)といった、大きな駅と駅とのあいだに集まつている。中央市場は、パリのど真中で大きくならざるを得なかつたし、事実、大きくなつたのである。したがつて、セバストポル大通りやテュルビゴ街は、恐らく、永久に、われわれの生の二大動脈になるはずである。上流階級は西の界限へ移つたが、まず影響はない。パリの原動力たる、活気にみちた大きな流れを迂回させるには、サン・トウアンで企てられた港灣の建設といったような、何か途轍もない事件が必要だろう……だが、ル・ブルヴァールは、こうした恵みの河からは、遥かに遠い。それなら、ル・ブルヴァールのエネルギー源は、何か。

ル・ブルヴァールは、(有名な広告にもあつたように) 商売と歓楽との中心地なのである。

商売の中心地でないことは確かである。証券取引所があるのはル・ブルヴァールの突っぱずれだし、商品取引所はフランス銀行や大蔵省や市役所と同じく、ル・ブルヴァールにはないのである。それなら、歓楽の中心地のほうは、どうか。その昔、ル・ブルヴァールは、たしかに歓楽の中心地だつた。しかし、今日では、シャンゼリゼやモンマルトルやブローニュの森のほうは、はるかに

斬新な、しかも多くの場合、はるかに凝った歓楽を提供してくれる。しかも、これは奇妙なことだが、ル・ブルヴァールが最も活気を呈するのは、劇場がまだひらかず、浮かれた生活に身を任すには今なお早すぎる、夕方の五時頃なのである。

かくして、そこには、好運に見放されたような街角がある。狭くて平凡で、どちらかといえば醜く、粗末な作りの、雑木しか植わっていない、庭園や公園からも遠く隔たった、散策者が緑陰を求めたり逢引き用のベンチを捜したりする辻公園すらない、そんな通りがある——それでいて、この街角、この通りでこそ、パリの心臓は高鳴るのである。何の取り柄もない通り。名声を恣ほしままにしてゐる通り。この短い通りこそが、ル・ブルヴァールなのである。それなら、こんな奇蹟を、一体誰が行ったのか。

「ラ・プレス」<sup>(3)</sup>紙である。

ル・ブルヴァールは、パリ人の生活や思想や活動や商売や歓楽の中心地ではないが、報道の核である。だからこそ、パリの人々はル・ブルヴァールに殺到する。

新聞が威力を振ったここ一世紀のあいだに、絶えず新聞を刷りつづけてきたこの界限は、ただそれだけで、すでに、パリでも第一級の界限となつたのである。

午後五時。夕刊が出る。翌日の朝刊が組まれる。押寄せる群衆。群衆は読む、群衆は問いただす。パリが翌朝知ることを、ル・ブルヴァールはその前夜に知る。ル・ブルヴァールには、力が、情報を与える力がある。事件をつかむや、ル・ブルヴァールは速断する。一晩中、世論に耳を傾けるのは、ここ、ル・ブルヴァールだけである。

火急の情報に、その情報に対する世論に、一喜一憂する人々。あけつびろげな人々、小心な人々、好奇心の強い人々、血気にはやる人々。こうした人々には、天の恵みであるニュースを、絶えず乞い、手に入れ、交換し、売ったり買ったりできる、この灰色の歩道、ル・ブルヴァールこそが似つかわしい。ル・ブルヴァール、それは、噂で持ちきりの証券取引所であり、飛切りの話に花が咲く証券取引所である。

ル・ブルヴァールの特権は、何よりもまず、知ることであり、しかも、詳しく知ることである。なぜなら、万事は公にされなくても、万事は言い尽されているからである。この通りにあつては、頭文字なぞ用をなさない。G：氏、N：氏、D・X夫人などと秘密めかしてみても、正体はあばかれる。《評判に疵のついた身分のある人》の名前であらうが住所であらうが、《ヴェールで顔を被った貴夫人》の名前であらうが住所であらうが、ここでは、たちどころに知れ渡る。新聞が事件の詳細を用心深く伏せておいても、ル・ブルヴァールが事の真相を教えてくれる。胡散臭い財界人が広告をだしに使用してわざと景気を煽つても、ル・ブルヴァールはその男の化けの皮を剥ぎ、後は、口を嚙む。ル・ブルヴァールはあらゆるキャンペーンを予測する。ル・ブルヴァールは、あらゆる世論の動きや、世論の盛り上がりや、世論の波及効果を、事前に察知する。この通りは、眼に見えぬ世界をあばく、天文台である。

ル・ブルヴァールを四方八方から取囲み、侵略し、奪取するのは、「ラ・プレス」社である。オペラ座広場やオペラ座通りやリシユリユー街やクロワサン街やモンマルトル街やフォブール・モンマルトルやエルデル街やドルオー街やレオミュール街やラファイエット街のことを、「ラ・プレ

「ス」社はすっかり呑み込んでゐる。「ラ・プレス」社は、城壁を思わすル・ブルヴァールに陣を敷き、打合せをする。その他の街は活動の場にすぎない。「ラ・プレス」社にとって、ル・ブルヴァールは要塞なのである。「ラ・プレス」社はル・ブルヴァールを思いのままにしてきた。今日の言葉でいえば、「ラ・プレス」社とル・ブルヴァールとは、同義語である。この新聞社は、ル・ブルヴァールに、おのが性格と習慣と人相までをも与えた。今日のル・ブルヴァールを産んだのは、他ならぬ、「ラ・プレス」社なのだ。ル・ブルヴァールを生かすも殺すも、「ラ・プレス」紙次第である。

だから、ル・ブルヴァールは、年々変わるのではなくて、日々変わる。二十年前のル・ブルヴァールも、今見るル・ブルヴァールも、まるつきし変つていない。が、夜の空間のなかで、ル・ブルヴァールは突如変貌する。この通りには、潮の満干もあるし、嵐もある。

パリの他の通りには、単調さがつきものだが、ル・ブルヴァールからすれば、そんなものは我慢ならない。パリには、どこにでもあるような通りが多いが、ル・ブルヴァールは違う。ある種の通りには、ある種の祭日がある。シャンゼリゼにはグラン・プリ・レースがあるし、外環状線には各週ごとに市が立つ。だが、これとて、毎年定つた日に巡ってくるものなのであつて、うんざりするほど単調だ。ル・ブルヴァールは、急変する、疾風はやてのもとでの、海のように。

今宵ル・ブルヴァールは静かである。散歩をしている人々がいる。気晴しをしている人々がいる。何の屈託もなく才気をひけらかしている人々がいる。洒落た言葉が交わされる。ル・ブルヴァールは、道ゆく女たちの興味をそそる。通りには、流行の粋を尽した衣裳があふれる。ある女優の新車

がセンセーションを巻起している。見知らぬ男と連立って歩いている女を見るや、男どもは頭をもたげ、その女の身の上を話したり、その女の伝説に尾ひれをつけたりする。モリス広告塔を囲む人々、シヨー・ウインドーを眺める人々、ポスターの類にまで眼を通そうとしている人々。夕暮れ時のル・ブルヴァールは、かくも暇なのである。

やがて、群衆の渦ができる。群衆は押合う。新聞の売子は声を張上げる。新聞社の照明掲示板にあかりがつく。重大ニュース。事件だ。波瀾含みだ。あつという間に、ル・ブルヴァールは暗くなつた。

パリじゆうの人々が、不安におののき、怒気を含み、熱狂し、ル・ブルヴァールへ駆けつける。群衆が通りいっばいに広がる。新聞の売子は息を切らし、汗まみれになって、刷り立ての、いまだ折つてもない、数百枚もの白い紙を、群衆に投げつける。その白い紙は、春を告げる小鳥のように、群衆の手から手へと舞う。新聞の売店は、群衆に襲われ、包囲され、新聞はたちまち売切れる。次の速報を待つ無数の人々。その無数の人々は、頭をもたげ、照明掲示板を窺う。「ラ・プレス」紙は群衆を手中に収める。「ラ・プレス」紙は、今や、至高の権力を握る。テールの隅で書かれ、すばやく組まれ、群衆の手に渡る記事は、パリの街を、一気に、沸き返らせることだろう。

## 訳註

(一) テトブ街とブルヴァール・デ・ジタリンとの角にあった、有名なキャフェ。料理と、玄関の石段と、テラ

スとが、殊に名高い。一八九四年に店を閉ず。

(2) 通称オステルリッツ駅。

(3) 一八三八年、エミール・ド・ジラルダンが興した日刊紙。主に政治と文学とを扱った。紙代が廉価であったため、発行部数はいちじるしい伸びを示した。



## 思想と逆説抄

ジュール・ラフォオルグ 武藤剛史 訳

### 倦怠

行動というものは、われわれが生きている限り、ごく自然に生まれてくる。夢もまた、たとえそれが希望というものをまったく含んでいないものであっても、一種の行動である。だが、この世のすべてに嫌悪を覚え、日曜日にすら自分の部屋に閉じこもり、かろうじて耐えられるのは通りから聞こえてくる物音（夕べの祈りから戻る人たち！）だけという心境になると、つまり、自分の殻の中にすっかり閉じこもってしまい、生きているのは、人生においてわれわれがめぐり会うことのできるたったひとりの主人、すなわち《死》の姿を見まいがためではないかというような事態に陥ると、われわれに残されているのは、もはや倦怠ばかりである。われわれは生きようとする意欲を持ち合わせない。さりとて、死の観念を糧にしては生きることができないし、死の観念とおしゃべりして時を過ごすこともできない。ましてや、死の世界がどこからどこまで生の世界と似通っており、死の世界にも生の世界と似たり寄ったりに興味や気晴らしがあり、そこでもまたわれわれは消化不